

八時十四分

月曜の朝、殺し屋は寝坊した。

けたたましく鳴る目覚まし時計に起こされた。昨夜、七時半にセットしたのだ。否応なく落ちてくる瞼をこすりつつ、殺し屋は起き上がった。半ば条件反射的に枕元からテレビのリモコンを取り、スイッチを入れる。

NHKのニュースが終わるところだった。朝の連続テレビ小説が始まる。

飛び起きた。

もう一度時計を見る。七時三十四分。テレビを見る。八時十五分。どちらが正しいか。考えるまでもなかった。

「アホ時計があつ！」

声に出して罵った。つい一週間ほど前に電池を入れ替えたばかりだ。が、高校入学の頃に買って、もう十年以上も使っている時計なのだ。今まで正しい時を刻んできたことのほうが、奇蹟と言えた。

慌てて身支度をする。ひげをあたり、顔を洗う。通常の二倍の速度で行なったつもりだったが、やはりそれでも遅刻だ。

殺し屋は、未練がましく昨夜から保温状態にしてあった炊飯器を見やった。ちくしょう、朝食は諦めざるを得ない。

ひどい寝癖を隠すために、キャップをかぶった。マンションの部屋を出る。が、今日は燃えるゴミの収集日だったことを思い出す。先週の木曜の収集日に出し忘れたため、ゴミ袋二つがすでにたまっていた。流しの三角コーナーにも、生ゴミが山になったままだ。

殺し屋は舌打ちをして部屋に戻り、ゴミをまとめた。部屋に三つあるくずかごは、ティッシュペーパーで一杯になっている——彼は、花粉症なのだった。

三つのゴミ袋を抱えて、マンションの階段を駆け下りた。ゴミの集積所で、同じ四階に住む自称女子大生と出会った。

「おはようございます」

その台詞を文字にしたら、末尾に「♥」と付けたくなるようなコケティッシュな声。殺し屋は、愛想笑いをして「おはようございます」と挨拶を返した。このところ、自称女子大生が自分に色目を使ってくるように思えるのは、単なる自意識過剰であろうか、と殺し屋は思った。いずれにせよ、悪い気分ではない。

自称女子大生はつい半月ほど前に、このマンションの彼と同じフロアに引越してきた。部屋は、殺し屋の隣の隣だ。

彼女が大学で何を専攻しているのか、そもそもどこの大学に通っているのか、彼は知らない。尋ねたこともない。

月十八万の単身者用マンションに独り暮らしをして、小綺麗な格好をし、二百万は下らない車まで持っている「女子大生」が、まつとうな学生生活を送っているとは思えなかった——殺し屋にとつては、どうでもいいことだったが。

自称女子大生は小さなバッグを抱えて、近くの駐車場に歩いていった。そのバッグにノートやテキストや筆記具が入っているようには見えなかった。おそらく、化粧品と手帳と携帯電話とゴム製品くらいだろう、と殺し屋は思った。ジーンズに包まれた形のよいヒップをこれ見よがしに振っているように思えるのも、彼の自意識過剰のなせる技であろうか。

九時五分

愛用の自転車にまたがり、「会社」に向かった。いわゆるママチャリである。が、一応三段の変速は付いている。「会社」までだいたい二十五分くらいかかった。九時の出勤時間には、ぎりぎりで間に合わない。

〈三ツ星出版〉は、四階建ての雑居ビルの二階と三階にオフィスを持つ、小さな出版社だった。殺し屋が〈三ツ星出版〉の入り口のドアくぐったときには、汗びつしよりになっていた。タイムカードを押すと、「9:17」と打刻された。社長は遅刻にうるさい。毎日タイムカードの打刻時間をチェックしているのだ。殺し屋は、お小言を覚悟した。

三階のオフィスに足を踏み入れると、真つ先に社長と眼があってしまった。うわっちゃあ、である。

「遅いじゃないか、たまの出勤日だというのに」

社長はマッチ棒のように痩せ、額が広くはげ上がり、度の強い近眼鏡をかけた小男だった。一見すると貧相な男だが、その眼は知性と決断力に光っている。

殺し屋は、頭を下げてデスクについた。

オフィスはさほど広くない。十坪ほどのスペースがファイルキャビネットに囲まれ、デスクが六つ島になっている。うち五つが常勤の社員のもの。末席の一つを、

彼のように週に数日しか出勤しない「特殊業務従事者」が共同で使っている。

椅子に座り、一息つく。不意にくしゃみが襲ってきた。立て続けに四回。それでまあお足りぬとみえる。五回目も襲ってくる前にティッシュで鼻を押さえた。はくふおん、という間抜けな音を立てて、鼻から息が漏れた。

隣のデスクのひろみちゃんが、「くすつ」と笑った。それと同時に彼の心臓も、「どくん」と跳ねた。

「花粉症、ひどそうですね」

ひろみちゃんはまっすぐに彼を見て言った。

「いやはや」

憧れの女性に不意に声をかけられ、彼は年寄りじみた言葉しか吐けなかった。

ちらつと、心臓がほんの一回打つか、打たないか、といったあいだけ、ひろみちゃんは笑みを見せた。が、微笑んだひろみちゃんに見とれる暇は与えられなかった。彼女はさっそく、一枚の紙を差し出した。

「何これ？」

「お仕事。来月の勤務日程表です」

レポート用紙の上で、無数のミミズがのたくっている。社長の字だった。

「この原稿、エクセルで表にしてプリントアウトしてくださいね、お昼までに」

「昼まで？」

「二時間もあればできますよ。プリントアウトしたら、契約社員の人数分だけコピーして、棚に入れて、一枚はいつものように掲示板に貼っておいてくださいね」

ひろみちゃんはすぐに前を向き直り、彼女の仕事に戻った。あくまでも事務的な会話。少しだけ殺し屋は失望する。

短大を出てこの《三ツ星出版》に就職して二年、二十二歳になるひろみちゃんにとって、彼は不定期に本社してくる契約社員の人に過ぎないのだった。それが、悔しい。ふと、自称女子大生を思い出した。あの女は、ひろみちゃんとほぼ同い年でも、知っている男の数はおそらく何倍、何十倍であろう。そんな女に惚れられても、嬉しくない——わけではないが、ひろみちゃんのほうがいい。

——いやはや、まったくもう！

殺し屋は声には出さずにつぶやいた。

コンピュータを立ち上げ、ちらりとひろみちゃんに眼をやった。化粧つ気はほと

んどない。短く刈った髪。やや度の強そうな眼鏡。地味なブラウスの上に地味な色のカーディガン。一見ただけでは野暮の塊のようだ。それなのになぜ俺は、彼女に惹かれるのだろうか。プロの殺し屋であるハードボイルドなこの俺が——と彼は自問した。

「字、読めませんか？」

不意にひろみちゃんが殺し屋を振り返った。彼は動揺を素早く飲み込んだ。

「え、えーとね、うん。社長の字を解読できるの、ひろみちゃんだから」

口の端のほうで笑つてうなずき、「勤務日程表」の原稿の適当なところを指さして、ひろみちゃんに見せた。

『二十四日 午後 森本・田崎・下山』って書いてあるんですよ」

「ありがとう」

殺し屋は自分では精一杯に魅力的な笑顔を作ったつもりだったが、今度もひろみちゃんは少しうなずいただけで、彼女の仕事に戻ってしまった。

殺し屋はコンピュータに向き直りつつ、思うのだった。この「勤務日程表」が今月の「特殊業務」の割り当て表だということを知ったら、ひろみちゃんはどんな反応を示すだろうか。

彼女に〈三ツ星出版〉は「殺し屋派遣業」もやっているんだよ、と告げたい誘惑に駆られた。

表計算ソフトを起動して、勤務日程表のテンプレートを開く。社長の書いた「勤務日程表」を打ち込む前にまず、ざっと原稿を眺めてみる。

来月の特殊業務は三件。彼の名は、そのうち一件の「特殊業務担当者」のなかに入っていた。彼は、ひろみちゃんに見せたのとは異なる種類の笑みを浮かべた。今月は「特殊業務」を担当できず、週二回の出勤でデスクワークを行なうだけだったのだ。「特殊業務手当」がなくて収入が少ないのもさることながら、何よりも自分が「特殊業務」に参加できないということ自体が我慢できなかった。

〈三ツ星出版〉の三階入り口には、月末に翌月の勤務日程表が張り出される。彼のような「契約社員」はそれを見ることによつて、今月の「特殊業務」の日程と、ともにその任務を遂行するパートナーの名を知る。無論、特殊業務はその性格上、あらかじめ決められたスケジュールどおりに進むとは限らない。むしろ計画を大きくはずれることのほうが多かった。さらに飛び入りの急な業務が入ることもしばし

ばだ。

——それにしても……

と殺し屋は考える。この稼業に就いてから、表計算ソフトの使い方を習わなければならぬとは思わなかった。

十二時四十一分

ひろみちゃんが言ったように「二時間」というわけにはいかなかったが、それでも昼休み前に勤務日程表を作り終え、コピーも終えて貼り出すことができた。

「ぼん、ちよいと来てくれ」

背後から社長の声があった。隣でひろみちゃんが「くすつ」と笑った。いつもならもう五年近くものあいだ彼を「ぼん」呼ばわりする社長にいらついたところだったが、今日の彼は機嫌が良かった。特殊業務を行なえるだけでなく、またしてもひろみちゃんの笑顔を見ることができたのだ。

社長は彼を四階の社長室に招き入れた。社長室といっても派手な調度などはなく、普通のオフィスと何ら変わるところはなかった。すべてにおいて地味な社長の性格が部屋にも現れていた。唯一の目立つものは、今は中学生の娘が幼稚園児のときにクレヨンで描いたという「おとさんのかお」である。最近、娘がちつとも話しかけてくれない、とぼやく社長は、その絵を眺めては父と娘の蜜月期に思いを馳せているのだろう。

社長室にはすでに森本と今井がいた。

「日程表、できましたよ」

彼はプリントアウトしたばかりの勤務日程表を社長に差し出した。が、社長はろくにそれを見もせずにデスクの上に放り、べつに一枚の紙を差し出した。

「すまんが、変更がある。作り直してくれんか」

「ええっ？」

彼は頓狂な声を上げた。

「なんだ、不満か」

「いや、だって、でも、やっと完成したばかりなのに」

「嫌ならいい。他の者に頼む。その代わりに下の仕事をやってもらうが、いいな」

「下の仕事」とはつまりこのビルの下の階で行なわれている業務——出版社とし

ての本来の業務——のことである。二階の契約社員たち、すなわち「殺し屋」たちはみな、「下の仕事」を嫌がった。それも無理からぬことだ。

彼らは殺し屋なのだ。

彼らは、〈三ツ星出版〉の裏の稼業を受け持つ「陰の存在」なのである。決して〈三ツ星出版〉の「表」の社員たちを軽んじているわけではなかったが、彼らには殺し屋としての誇りも矜持もあつた。

「わかりましたよ。直します。で、どこが変更なんですか？」

ぼんはため息混じりに訊いた。

「新しく特殊業務が一件入った。そいつを、だ」

社長は狭い社長室内をぐるりと見回した。

「ここにいる君らにチームでやつてもらいたい」

「ちよいと待つてくださいいな」

やや耳障りな声で異議を唱えたのは今井だつた。今井はぼんよりも数年年上だが、彼のことをいつまでも未経験の新米と見下しているところがあつた。彼は今井をぎろりとにらんだが、今井はその視線を難なくいなした。

「文句は認めん。今、この三人しか動けんのだ。な、ぼん。日程表を作ったからわかるだろう？」

「はあ、確かに」

しかし今井はまだ不満のようだつた。

「木下さんはどうなんですか？」

「海外研修中だ。ロシアに行つてる。帰国してから、本場仕込みの『実技』のレクチャーをしてみらうつもりだ」

「じゃ、三ツ矢さんは？」

「十二指腸潰瘍で入院中だ」

「火野さんはどうですか？」

「育児休暇中」

「わかりました。今回だけ辛抱しますよ。で、業務内容は？」

今井は唇の端をゆがめつつ尋ねた。その問いには、それまで黙っていた森本が静かに答えた。

「ほんとうなら、俺と三ツ矢がやるはずだつた。が、三ツ矢がダウンしてしまった

んで、おまえたちと組むことになった」

彼はこの家業を続けて二十年以上になるといふベテランだった。社長ともつともつきあいが長い古株だ。

社長がやや弁解口調で付け加えた。

「義理がらみで、どうしても飛び入りで受けなきゃいけなかった仕事なんだ。ほんとにすまんが、水曜までに頼む」

「水曜って、明後日じゃないですか！ しかもこの『ほん』と？」

今井が声を上げた。

「そう騒ぐな。俺と三ツ矢が下準備はしてる」

森本が赤いファイルを今井に手渡した。「特殊業務」の依頼内容と「対象」の情報が納められたファイルだ。彼も今井の手元をのぞき込んだ。

「対象」は大倉研二、四十九歳。とある消費者金融の社長。限りなくヤクザに近いが、どこの組の杯も受けていない。かろうじて片足だけ「堅気」の世界に名残惜しげに踏みとどまっている男だ。

市内で、妻と中学二年生になる娘、小学四年生の息子、老いた母の五人暮らし。郊外のマンションに二十三歳の愛人を住まわせている。今週の木曜には、その愛人とともにオーストラリアに旅行に行くという。家族には、会社の研修旅行と告げているらしい。

ファイルには以上のようなことが載っていた。当然のことながら、依頼者の情報、依頼の動機などは一切書かれていない。業務の実行者がそれらを知る必要はない。なまじ、そういった知識が入ると、業務の遂行に支障を来す場合が多い。依頼者、依頼動機への共感、業務遂行に焦りをもたらす。逆の感情、すなわち反感が与える影響は言うまでもない。

彼ら殺し屋がこの仕事を始めてから、何度となく繰り返し繰り返し頭に叩き込まれることがある。「入社」前の面接から新人研修、業務を任されるようになってからも半年に一度ある職員研修などの際、耳にタコができるほど聞かされ、答えさせられ、レポートに書かされることもある。

それは、彼らは「必殺仕事人」ではない、ということだ。

決して彼らは、弱きを助け、強きをくじく殺し屋家業ではない。同じなのは、報

酬を得て人の命を奪う、という点のみだ。

彼らは業務の遂行そのものだけを考えればいい。業務そのものの妥当性、業務遂行が「対象」の周囲の人間に及ぼす影響などに考えを及ぼす必要はない。考えてはいけない。

「この大倉は、毎朝九時には出社している。通勤には自家用車を使っている。紺のレクサスだ。どうしてこういう連中はレクサスに乗りたがるのかね。日本人のベンツ・コンプレックスは醜い限りだ。毎日八時過ぎまで社にいて、そのあいだめつたに外に出ることはない。詳細はそのファイルに書いてあるが、要するに、チャンスはかなり限られてくる」

「手段は？」

「ぼん」は尋ねた。

「なにぶん、飛び入りの仕事だ。準備期間が短かった。『化ける』余裕もなかった」森本の言う「化ける」とは、殺し屋が身分を偽ったり、時には文字通り変装するなどして対象に接近することだ。そのためには、だいたい最低一ヶ月の準備期間が必要だった。

「すると飛び道具ってことになりですね。通勤途中の車を狙い撃ちますか」

今井が意気込んで言ったが、それを手で遮るようにして社長が静かに口を挟んだ。

「いや、そつちを準備する暇もなかった。今、足のつかないチャカのアダプターがない。車なら、ある」

今井は聞こえよがしに舌打ちをした。

殺し屋稼業に就く者なら誰でもあこがれるのが「飛び道具」、すなわち銃器類による仕事だ。経験の浅い、若い殺し屋は特にそうだった。しかし実際の特種業務のうち、銃器類を使用するのは一割程度に過ぎない。また、殺し屋が銃器類を携帯することは決してない。「業務」のときどきに、会社から支給されたものを使用する。そして業務終了後には、また会社に返却することになっている。会社側は、独自のルートで、使用済みの銃器類を処分する。つまり、銃器類は一回の業務ごとの使い捨てなのだ。

森本は冷ややかに今井を見つめ返した。

「今井、おまえみたいな奴に、街中でドンパチやられちゃ困るんだ。何年この仕事やってる？ いい加減にわかかってきてもいい頃だと思っがな」

今井はまたしても舌打ちした。森本やあくまでも冷やかな口調を変えなかった。「おまえたちには、最後の仕上げだけを頼むんだ。下準備の苦勞がない代わりに、仕事の派手さもない。その辺が不満なら、手伝ってくれなくてもいいんだよ」

今井の三度目の舌打ち。

ぼんは、誰にも聞こえないように、そつとため息をついた。今回の業務は簡単かもしれないが、いつもよりも疲れそうだ。

「さ、早く動け。今から『特殊業務手当』をつけてやるから、早く外に出るんだな」

社長は野良猫でも追い払うかのように、今井とぼんに手を振ってみせた。

「あの、社長」

ぼんは機嫌を伺うように言った。

「何だ？」

「あのお、飯は？」

「抜け」

にべもなかった。

十二時七分

外に出た途端に、花粉症の症状がひどくなった。車のなかでくしゃみを連発した。何度もティッシュで鼻をかんだので、鼻の頭が真っ赤になってひりひりと痛かった。今井は助手席から、そんな彼を見て、軽蔑しきったような嘲笑を浮かべていた。

彼ら三人は社を出て、森本の運転する車で、大倉研二の通勤ルートをたどっていた。

渋滞に巻き込まれなければ、大倉の会社から自宅まで約三十分かかる。

「俺と三ツ矢は、奴の出勤、帰宅の時間にあわせてこの道を走ってみた。特に朝はずいぶん様相が違う。この辺り一帯、だいたい三キロ近く渋滞するんだ」

「夜はどうなんですか？」

ティッシュで鼻をかみながら、ぼんは尋ねた。

「大倉がまっすぐに帰宅するなら、だいたい九時過ぎに自宅に着く」

「奴はまっすぐ帰るんですかね」

今井が訊いた。

「それはわからん。木曜から愛人と一緒に旅に出るんだから、たぶん、今日明日と

も女と会うに違いない」

ぼんは続けざまに四回くしゃみをした。森本は表情を変えなかったが、今井は、まるで汚いものでも見るかのように眉間に皺を寄せた。

「すいません……とすると、やるとなると朝か、さもなきや女と別れてからつてここにになりますね」

「面倒なときにや、もろともって手があるさ」

ぼんは口をつぐんだ。そこまでは考えたことがなかった。今井は指先でウィンドウをこつこつと叩いて拍子を取りながら、鼻歌を歌っていた。ぼんが高校生だった頃にはやった歌謡曲だった。

彼らは続いて大倉研二の自宅に向かった。市の東のはずれに位置する、閑静な住宅地だった。ここ数年のあいだに開発されたところで、似たような作りの二戸建て住宅が、まるでおもちゃの街のように並んでいる。

狭い庭には、数多くの鉢植えが、ずらりと並んでいた。あとひと月もすれば――ぼんの花粉症が緩和するような季節になれば――カラフルな花がこの庭に満ちふれることだろう。

が、それを大倉研二が見ることはない。

「いやなもん、見ちまったかな」

不意に森本が独りごちた。

ぼんは顔を上げた。

紺色のセーラー服を着た少女が、今、大倉家の玄関をくぐるところだった。

「中学二年でしたね」

ぼんは言った。森本は無言でうなずいた。春休み中なのに制服姿なのは、きっと部活の帰りなのだろう。

確かにいやなものを見てしまったな、と彼は思った。これから殺すべき人間の娘の姿など、知らないほうがいいに決まっている。彼らにとって「対象」はただの「対象」であるべきだ。それ以上の人間性を感じるべきではなかった。

「中二ね。まだまだ蒼いっぼみってやつだな」

今井が「ひひひ」と笑った。ぼんは、今井の眼のなかに好色そうな光を見つけた。じわじわと怒りが膨れてくるのを自覚した。

「なあ今井」

森本が静かに言った。

「何ですか」

「今、俺の一番欲しいものがわかるか」

「……そう、キャッシュ、ですかね」

「そいつは二番目だ。今、この瞬間に欲しいものはわかるか」

今井は大倉家に眼をやった。そしてまた「ひひひ」と笑いをにじませた。

「穢れを知らない蒼いつぼみですかね」

「違うな」

森本の声はぞつとするほど冷たかった。が、今井はそれに気づいていない様子で、

また「ひひひ」と笑った。

「ついでにだのの仕事で使ったチャカが、今欲しい。もう処分しちゃったがな。F

Nブローニング・ハイパワー」

「ああ、いい銃ですねえ。大きすぎず小さすぎず、手にしっくり馴染むんです。9

ミリ・パラベラム弾だから、破壊力もなかなかのもんだ。そいつで大倉を殺りたい

んですか？」

「いや、違うな」

森本の両眼に鈍い光が宿ったのに、ぼんは気づいた。

「じゃ、何に使うんです？」

「子どもに汚らしい欲望を感じるくだらねえクソ野郎の頭を吹っ飛ばすんだ」

車内を沈黙が覆った。

やがて今井が口を開き、力無く「ひひひ」と笑った。

十四時四分

続いて彼らは、大倉の愛人の住むマンションに向かった。愛人の名は塚本遙香と
いった。二十三歳。高級会員制クラブ〈ヘシャ・ノワール〉勤務。月曜日は大塚遙香
の公休日になっていた。

遙香の住むマンションは、十二階建て。当然のことながら、オート・ロック式の
エントランス・ホールには監視カメラがある。

森本は無言のまま、一枚の写真を今井に渡した。

「へえ、なかなかいい娘じゃないですか。ちよつと鼻が上向きなのが、俺の好みじ

やねえけど」

今井は言った。ぼんは鼻をぐしゅぐしゅいわせながら、助手席の今井の肩越しに、写真を覗き込んだ。

確かに、塚本遙香は美人だった。望遠レンズで隠し撮りされた、決して写りのよくない写真だったが、それでも彼女が男心をそそる女であることは見て取れた。ぼんは、ふと同じマンションの「自称女子大生」を思い出した。彼女もまた、誰かに囲われている女なのだろうか。

二十三歳と言えば、ひろみちゃんとさして変わらない歳だ。もしかして二人は、中学や高校で席を並べていたかもしれない。同じ一人の男子生徒に思いを寄せ、張り合ったこともあり得たことだ。が、それから数年で、両者の人生は大きく隔たることになる。一人は豪奢なマンションに住み、親子ほども離れた歳のオヤジに養われ、抱かれている。もう一人は、ほとんど化粧つけもなく地味な服装に身を包み、日々デスクワークに励み、男の影など感じられない。同じ歳でありながら、大きく違う人生だ。

彼が二十一、三歳のとき何をやっていただろう。

そう、確か大学を中退してあちこちをふらふらと旅していた頃だ。社長に出会い、この稼業に足を突っ込んだのも、その頃だった。

「ヤバいぞ」

いつにも増して険しい森本の声に、ぼんの回想は中断された。

フロントグラスの向こう、一台の高級車が停まるのが見えた——紺色のレクサス。

「会社早退して、女のところに寄るかよ」

今井が鼻で笑いながら言った。

路上駐車されたレクサスから降り立ったのは、長身の中年男性だった。写真で見るとよりも押し出しは立派だ。ややいかがわしい消費者金融の社長というよりも、紳士服量販店の広告に登場するモデルといったほうがふさわしいように見えた。

大倉は、彼らの乗った車に気づいた様子もなく、まっすぐにマンションのエントランス・ホールへ入っていった。

「ぼん、くしゃみするなよ」

森本は冷ややかに言った。ぼんは素直にうなずいた。助手席では今井が「ひひひ」と声を上げる。

大倉研二は、五分ほどで再び現れた。無論、愛人の塚本遙香を伴って。二人はレクサスに乗り込んだ。

「尾げるぞ」

森本はアクセルを踏み込んだ。紺色のレクサスから二十メートルほど間隔を置いて、彼らは尾行を開始した。

ぼんは下腹に心地よい緊張感を覚えた。これが、「特殊業務」なのだ。〈三ツ星出版〉の通常業務に就いている者たちには決して想像すらできない、特別な仕事を、彼は今行なっているのだ。もう花粉症の症状も忘れていた。

十五時三十五分

レクサスは都心を通り抜け、市を離れた。さらに国道を北へ三十分あまり走ると、道の両側にはちらほらと水田が見られるようになった。

「いつたい連中、どこへ行くつもりなんだ？」

今井はいらいらと指先でサイド・ウインドウを叩いていた。その指先は、もはや昔の歌謡曲のリズムを奏でてはいなかった。

「うまくないな、まったくうまくない」

森本は呟いた。バックミラー越しに、森本とぼんの眼が合った。

「あの二人が、こっちのほうへ来たことはなかったんですか？」

ぼんは尋ねた。

「はじめてだ。こんな町外れに買い物に出たとも思えん。まったく、予想外だよ。うまくない」

「じゃ、早々にやっちまいますかね」

今井が意気込んで言った。

「どこでだ？ おまえさんは簡単に言うがな、下調べがついていないような場所でやるわけにはいかんだろうが」

大倉のレクサスとのあいだに四台の車を挟んでいたはずだったが、いつしかその四台は道をそれてしまった。森本は車の速度を落とした。通行量の多い都心の道路とは違い、郊外の小さな道での尾行は困難を極める。

レクサスはさらに脇道にそれ、東に向かった。片側一車線の道路は、やがてさらに幅が狭まり、センターラインもいつしか消えていた。住宅よりも農地の割合が大

きくなっていた。対向車はほとんどない。レクサスとの距離は百メートルを超えていたが、そのあいだに他の車の姿はなかった。

「気づかれちゃいないですかい？」

今井が言ったが、森本は答えなかった。

「民家が少なくなったところで、一気にいつちまいますよ。追突して、田圃に落つこととしてやりやいい。足止めしといて、大倉と女の頭をぶち割ってやりや完璧ですよ」

「黙ってる」

森本の声は低かったが、凄味があった。その言葉はぼんに向けられたわけでもないのに、彼は胃の下部が縮み上がるのを感じた。

「つたく、あの二人、何考えてやがんだ？」

今井はサイドウィンドウを開けて唾を吐いた。

「待て、連中、停まるみたいだ」

森本は息をひそめた。

彼の言葉通り、レクサスは前方の路上に停車した。その付近に民家はなかった。人影も、ない。道の片側には畑が広がり、反対側は雑木の茂った小高い丘になっている。緑色の木々のあいだから、赤黒い色をした柱のようなものが垣間見えた。鳥居だ。丘には、神社があるらしい。

ハザードランプを点滅させたレクサスから、男と女が降り立った。二人は三人の尾行者には気づいた様子も見せず、まっすぐに丘に足を向けた。すぐに二人の姿は雑木の陰に見えなくなった。

「こんなところでお参りか。おかしな連中だぜ、まったく」

今井の言葉には何も言わず、森本はゆっくりと車を進めた。丘の手前、五十メートルほどのところで彼は停車した。

「降りるぞ」

「ここで、やるんすか？」

今井がにやり、と笑った。森本は黙ったまま車のエンジンを止め、ドアを開けた。

「ぼんと今井は、二人のところに行つて様子を探れ。そして五分で戻つてこい。俺は奴らのレクサスを調べてみる。いいか、勝手に手出しをするんじゃないぞ。勝手に『処理』なんかしようと思えるな。特に今井、おまえだ」

「ずいぶんと信用ないっすね」

「黙って行け」

森本の、冷ややかだが疑問も反論も許さない鋭さを秘めた声に後押しされるようにして、ぼんは今井とともに神社の鳥居に向かった。

この辺りには、杉の木が多いらしい。そう気が付いた途端、たちまち彼は、立って続けに四回くしゃみをした。声を殺したつもりだったが、ぼんは自分のくしゃみの音に、自分で縮み上がった。

「馬鹿野郎め！」

今井が吐き捨てた。二人とも鳥居の下で立ち止まり、様子をうかがった。見上げると、石段がまっすぐに続いていた。百段以上はあるだろう。大倉と女の姿は見えなかった。ぼんのくしゃみを聞きつけて姿を現す気配もない。

今井が上着の前を開いて、何かを探っていることに気づいた。

「今井さん、まさか……」

今井は「ひひひ」と笑い声を上げた。上着の下から出された彼の右手には、黒い塊が握られていた。

「今井さん、どうしてそれ……」

「なあ、ぼん。俺たちの稼業は、いつ特殊業務が入るかわからねえ。常備しておくことが肝腎なんだよ」

今井は、子どもが新しいおもちゃを見せびらかすように、手のなかで拳銃——強化プラスチック製の売り物のグロック17——をちらちらと振って見せた。

「規則違反じゃないですか。銃器類は使ったあと返却しないと……。社長や森本さんは知ってるんですか？」

今井は「ふふん」というふうには鼻を鳴らすと、石段を上がり始めた。ぼんも慌てて彼の後を追った。

「なあ、ぼん、おまえに教えてやるよ。今、この業界にはライブアルが増えてきてんだよ。『生き馬の目を抜く』ってえやつだな。〈三ツ星〉みたいに、現場の人間に對して束縛が多いようなところは、すぐに駄目になる。この仕事は臨機応変でなきゃいけねえんだ」

「でも、チャカからはいちばんアシが付きやすいつていうじゃないですか」

「俺は今までそんなドジ踏んだことはないね」

「今までつて……そんなに前からチャカ持ち歩いてるんですか」

今井は答えなかった。

石段を登りきる手前で、二人は歩みを止めた。今井はグロックを構えると、足音を忍ばせてそつと石段を上がりきり、すぐに脇のカエデの木に身を隠した。ぼんも一度深呼吸をし、ティッシュで鼻を拭うと、今井が隠れたのとは反対側のシイの木の陰に身を潜めた。

大倉と女は、本殿の賽銭箱の前に立っていた。二人とも手を合わせていた。

ぼんは、急に口のなかに苦みが広がるのを感じた。殺し屋に狙われていることも知らず、二人は神社の神様に向かって手を合わせている。いったい何を祈っているのか。旅行の無事を？ 二人の幸福を？

ふと見ると、今井がカエデの木の陰から身を出すところだった。今井は銃口を上に向けた、やや腰をかがめるような姿勢で、大倉と女のほうへ向かい始めた。ぼんは狼狽した。二人に気づかれずに今井に声をかけることはできない。

今井は一度ぼんのほうを振り向いた。そして、にやりと笑ってみせた。ぼんは歯がみした。今井と森本、どちらを選択すべきか。

悩んでいる余裕はなかった。彼もシイの木から体を出し、大回りをして大倉と女に近づいた。「こと」の瞬間に、二人の注意をこちらにひきつけるつもりだった。

今井と大倉たちのあいだは、もう十メートルあまりしかなかった。今井は銃を構えた。銃口の向こうには、大倉の背中がある――

はずだった。

次の瞬間だった。大倉が振り返った。今井の存在にとうに気づいていたかのよう

に。ぼんはとつさにダツシュした。左側から大倉と女に近づく。女がこちらを振り向いた。彼女もまた、彼と今井の存在をすでに知っていた様子だった。その眼のなかに驚愕の色はなかった。

銃声が轟いた。大倉の体が地面に転がった。

無我夢中で女に飛びかかった。両腕を女の肩に延ばした。が、そのとき、女が身を沈めた。彼の手は空気を掴んだ。次の瞬間、腹部に激痛が走った。彼は、信じられない思いで女を見た。女の拳が、彼の鳩尾を見事にとらえていた。体を二つに折った。激しく咳き込んだ。女が身を翻すのが見えた。

二発目の銃声——こもった音だった。

グロックではない。ぼんははつと顔を上げた。

大倉が、銃を構えていた。おそらくその手に握られているのは、FNブローニング・ハイパワーであろう。銃口にはサイレンサーが取り付けられている。森本が欲しいと言っていた銃だ。

今井の両眼が、驚愕で見開かれていた。

大倉が撃った。今井の体が揺らいだ。ぼんは、言葉にならぬ声を上げた。

さらにこもった音。

今井の頭がぐんと後ろにのけぞった。同時に赤黒い霧が彼の後頭部からぱつと吹き出した。

そのまま、今井は崩れ落ちた。

今井は、死んでいた。

ぼんはあえぎながら、今井の屍体を見つめた。口のなかはからからに乾燥していた。怒りでもない。哀しみでもない。恐怖でならない。ただ、驚きだけが彼の頭を支配していた。

彼は放心したように、大倉に眼を向けた。次の銃弾が撃ち込まれるのが何であるか、彼の朦朧とした意識でも、わかっていた。吐き気を催した。

ゆつくりと、大倉が近づいてきた。その横に、塚本遙香も並んだ。女の顔には、意外なほど優しいげな笑みが浮かんでいた。死にゆく愚かな殺し屋への憐憫の笑みか。

「一発で、やれなかったのか」

背後から新たな声が聞こえた。振り返った。

「嘘、だ……」

ぼんは呟いた。口を開いたが、それ以上言葉が出てこなかった。舌が発泡スチロールのように乾ききって、こわばっている。

森本が、歩み寄ってきた。その口の端は、やや不愉快げにゆがんでいる。

わけがわからなかった。ぼんは森本と、大倉を交互に見た。森本はぼんの姿が眼に入らないかのように彼の脇を通り過ぎて、大倉の前に立った。

「一発でやれと言ったはずじゃないか」

「面目ない。急所をはずした」

大倉は苦笑いし、FNブローニング・ハイパワーを森本に手渡した。それからぼ

んを一瞥すると付け加えた。

「それよりも、森本さん。この若い兄さんが大変だぜ。遙香の正拳、まともに腹で受けたから」

塚本遙香がにつこりと笑みを浮かべてぼんに歩み寄ってきた。

「ごめんなさいね、手加減する余裕、なかったの」

「ちくしょう……」

ぼんはうめいた。うめくと同時に、くしゃみが出た。

十六時十七分

「ちびらなかつたのは、高く評価できるだろうな。社長にはそう報告しておくよ」
社へ戻る車中で、運転席の森本が、あくまでも真面目くさった声で言った。ぼんは無然とした。

「まったく……」

言いかけたが、腹にびりびりつと痛みが走り、彼は顔をしかめた。

彼の隣で、「塚本遙香」がくすつと笑った。「大倉研二」が本物でない以上、この名前も、彼女の本名ではないのだろう。

「ごめんね、まさかあなたが飛びかかってくるなんて思わなかったの。無意識のうち、体のほうが動いてた」

「ま、訓練の賜物さ」

助手席の「大倉研二」が冷ややかに言った。

「ちくしょう……」

ぼんはますます無然とし、力無く呟いた。が、ふくれっ面をするのも大人げない
と思い、彼はわざとらしくサイド・ウィンドウから外の景色を眺めた。くしゃみが
立て続けに三回も出た。そのたびに痛みが腹に走る。

「今井の屍体、ほつといていいんですか」

ぼんは森本の後頭部につつかかるように言った。

「うちの処理班が今頃、後始末をやってくれてる。おまえらが神社の階段を上がつ
てるあいだに、連絡しといたんだ」

「屍体の処理をですか？ まだ何も始まっちゃいなかったのに？」

「迅速な行動こそが、いい業務結果を生む」

「ねえ、怒ってるの？」

通称「塚本遙香」が少し甘えるような声で尋ね、さらに彼の太ももの上に手を置いた。しかし、その程度で彼の機嫌が直るはずもなかった。腹の痛みもまた。

「今井は、何者だったんですか？　なんであの男が『対象』になったんですか？」

「チャカだ」

森本が感情を交えずに一言だけ言った。

「ちよつと待つてくださいいよ、森本さん。業務終了後も拳銃を返さないってだけで、

殺^やられちゃうんですか、うちの会社では」

「馬鹿、そんなことじゃない」

苦笑いしながら「大倉研二」が振り向いた。

「奴は、返却しないチャカを横流ししてた。素人さんに」

さらに「塚本遙香」が付け加えた。

「ほら、先月の頭に、大学病院の外科部長が射殺されたって事件があったじゃない？　覚えてない？」

「さあ、知らないね」

ぼんは邪険に答えた。すると森本の鋭い声が飛んできた。

「日々そういつた事件には敏感になっておかなきゃ、一流にはなれんぞ。ぼん、新聞はとってるんだろうな」

「そりゃ、とつてますよ。朝刊だけ」

「とつてても、おまえの読んでるのはテレビ番組欄とスポーツ欄じゃないのか？」

「そんなことないですよ」

いらだつて語気を荒げたが、その瞬間に腹部に痛みが走った。ますます腹が立つ。

「この世の中のことを知らないですむような職はねえよ。それは、俺たちも同じことだ」

「それで、その医者殺しに使われた銃が、うちのなんですかね」

ぼんは腹をさすりながら尋ねた。

「ああ。おまえも知ってると思うが、警察にも俺たちの業務に協力してくれる人間がいる。そいつがいつも鑑識の情報を流してくれてるんだが、調べてみると、うちが去年仕入れた銃とライフルマークが一致したんだ」

「それだけでもえらいことなのに、そこにつけ込もうという奴が出てきた。〈仁田エントープライズ〉って聞いたことあるか？」

「いえ」

「この業界への新規参入者だ。チャカの流出事件をネタに、うちをつぶそうとしてるらしい。すでに社員に接近している。うちの情報を引き出したり、あるいはハントハンティングしたり。すでに転びそうな社員が何人かいるのがわかってる」

「そこで、社長が森本さんに内偵を依頼した」

通称「大倉研二」が振り返って付け加えた。

「厭な仕事だったぜ、まったく。何しろ、相手は身内なんだから。それにクロと出たときには、そいつを処理しなきゃいけないんだ。毎日会社で顔を合わせてるかもしれない奴を、だ」

「一つ、もつとも基本的なことを質問してもいいですかね」

ぼんは森本の後頭部に向かって言った。

「何だ」

「ここにいる『大倉』さんと『塚本』さんは、何なんですかね？」

「わたしたち？ わたしたちも、〈三ツ星出版〉の社員よ。めったに出社しないから、あなたはわたしたちに会っていないでしょうけど」

「塚本遙香」は言った。

「じゃあ、昼に見た家は？ 中学生の娘は？ いったい誰なんです？」

「さあねえ。俺もよく知らん」

「大倉」はこともなげに言った。

「知らんって、あんたの家と娘だったはずでしょ？」

「俺は見えないんだ」

ぼんは、今度は森本をぎろりとにらんだ。

「いや、俺も適当に選んだからな」

などと森本は無責任なことを言う。

「今井を殺すために、わざわざこんなお芝居をうつ必要があったんですか？ 俺にはどうもその辺が納得できないんですけどね」

「よつぽど腹に据えかねてるようね」

また彼女がくすつと笑った。ひろみちゃんの笑みのほうがよつぽど魅力的だぜ、

と彼は言おうかと思つたが、言わなかつた。

「だいたい七割の人間が、怒る。二割が笑い出し、一割が泣いてこの仕事を辞める」
森本が言った。

「七割って、どういう意味ですか？」

「まだ、わからないの？」

塚本遙香が少し上目遣いで覗き込む。男に媚びるそんな顔にだまされはしないぞ、と彼はわざと唇をゆがめ、脇に眼をそらした。

「わからないって、何が？」

助手席の「大倉研二」がぼんを振り返つた。

「おまえ、聞いていないのか、研修のことを？」

「はあ？」

「半期に一度の『特殊業務研修』のことじゃない。抜き打ちにやる臨時研修だ。聞いてないのか？」

そういえば、確かに以前にそんなことを社長から聞いた覚えがあつた。この稼業に足を踏み入れて間もない頃だつた。社長やその他の特殊業務従事者から、仕事——つまり殺し——に関してガイダンスを受けたときに、確かそんな話が出たことがあつたはずだ。ある程度業務に慣れてきた頃、彼もしくは彼女の特殊業務従事者としての資質を再確認するために、抜き打ちで『臨時研修』が行なわれる。それは極めて難しく、例年何人もが研修をクリアできず、あるいはクリアできたとしてもこの稼業の厳しさに音を上げて脱落する、とのことだつた。

「じゃ、これは……」

「そうだ。おまえさんの抜き打ち研修でもあつたんだ」

「じよ、冗談でしょう……！ だって、実際に、今井を殺してるんですよ。それで、

『研修』だなんて」

「おいおい、おまえさんは、そんなに甘ちゃんだったのか？ 社長はずいぶん高く買つていたみたいだが、見立て違いか」

「うちの会社の研修は厳しいの」

「あんたも、研修を受けたのか？」

彼は無然とした表情で尋ねた。

「受けたわよ、もちろん」

「彼女の場合は、二割の場合だった」
森本が言った。

「つまり……笑った……？」

ぼんはあきれ気味に尋ねた。塚本遙香は、悪びれた様子もなく、肩をすくめた。「だって、眼の前でおばさんがイングラムで蜂の巣にされたんだもん。現実のこととは思えなくて、笑っちゃったわ」

「そのあと何時間かしてから、我に返って、わんわん泣いたんだがな」

助手席の大倉研二が言うと、塚本遙香は赤面して口の端をゆがめた。

ぼんは大きくため息をついた。それだけでも腹が痛む。垂れてきそうな鼻水とテイツシュで拭い、彼は言った。

「それであんたたちは、今回の一件を、俺の研修に当てようと思ったんですか」

「『あんたたち』じゃない。社長が、だ。それで、ここにいる二人をおまえさんの研修の評価委員に選んだ」

「ちくしょう、なんてこったよ」

ぼんはテイツシュで鼻をかんだ。鼻の頭が赤く腫れてひりひりと痛かった。彼は「塚本遙香」を向いた。

「あんたも俺の『評価委員』ってわけか。俺とたいして年も違わないみたいだけど、あんた、そんなに偉い立場なのかい？」

「べつに偉くはないわよ。ただ、あなたより経験があるってだけ」

「経験？ 失礼だけど、あんた、いくつなの？」

「女の口に歳を訊く男って、最低」

そのやりとりと聞いてにやにやした大倉研二が、ぼんを振り返った。

「十六でこの業界に入った娘だ。おまえさんはかないっこないよ」

「いやはや、まったくもー」

ぼんは嘆息した。

十七時二十分

社に戻り、三階のフロアに上がると、ひろみちゃんが帰り支度をしているところだった。

「お疲れさまですね」

ひろみちゃんはぼんを見てにつこり笑った。一日に三度も彼女の笑顔を見ることのできるなんて、めったにないことだ。ほんとうなら狂喜すべきなのだろうが、彼の気は晴れなかった。

「今日の外回り、どうでした？　なんだか疲れてるみたいですけど」

「そう、とつても疲れちゃったよ、心底ね」

情けない気分でひろみちゃんに答えた。彼女に、今日あった出来事を洗いざらいぶちまけたくなった。彼女にだけではない。今、一階から三階にいるすべての《三ツ星出版》社員に、会社が日の当たらない場所で行なっている業務のすべてを暴露してやりたかった。

ぼんはそのときの光景を夢想しつつ、業務日誌に今日の業務を記録した——午後より特殊業務。

「社長は、いる？」

「四時前に、なんだか緊急の用件とかで、外に飛んでっちゃいましたけど。大事な用ですか？」

「そう、大事な用。ちよつと、怒鳴り込んでやろうかと思っただけど」

「うーん、残念。今日は社に戻ってくるかわからないそうです」

「まったく、疲れる仕事だよ」

「でも、デスクワークだつて疲れるんですよ。週に五日、毎日毎日パソコンのディスプレイと向かい合つてるのもきついです」

「そうだ、ひろみちゃん、もしもよかつたら今日——」

ハンドバッグを抱えて立ち上がるひろみちゃんに声をかけたときだった。エレベーターのほうから、彼の名を呼ぶ声があった——女の声。厭な予感を胸に、振り返った。

案の定だった。

車で直接帰つたはずの塚本遙香が手を振っていた。につこりと笑みを浮かべ、まるで恋人を迎えに来たかのような表情だ。

「塚本さん、今日出勤日じゃなかったはずなのに」

言いかけたひろみちゃんは、ふとぼんのほうを向き、小さくうなずいた。「あ、そういうことだったのか」とでも言うように。

「あ、いや、決して『そういうこと』じゃあ……」

「じゃ、わたし、今日はお先に失礼します」

ひろみちゃんは軽く頭を下げた。感情を混ぜない、極めて事務的な仕草。タイムカードを押し、エレベーターの前で一度立ち止まると、塚本遙香にも頭を下げ、エレベーターの箱に乗り込んでひろみちゃんは去った。

ぼんは手招きする塚本遙香につかつかと歩み寄った。

「あなた、ほんとに塚本遙香って名前だったのか」

「そうよ、いけない？」

「べつに。で、何の用だ？」

「緊急事態よ。そんなに怒った顔しないの。人の恋路の邪魔をするつもりはないんだから」

「やかましい」

「あなた、狙われてるわよ」

「はあ？」

塚本遙香は、ちょうど到着したエレベーターの箱の中に、彼を突き飛ばすようにして乗り込ませた。一階に着くと、彼女はぼんの腕を掴み、《三ツ星出版》の前に路上駐車されたワゴンRに彼を押し込んだ。外の空気を吸った途端に、花粉症の症状が激しくなった。くしゃみを連発する彼を、塚本遙香が冷ややかに見ていた。

「さっき言ったでしょう、新規参入者の《仁田エンタープライズ》。あそこの社員が、あなたを狙ってるのよ」

「へえ、そいつは光栄なことだな」

「この数週間のあいだ、あなたは見張られていたみたいなの。《仁田エンタープライズ》の調査をしていた社員から、社長のほうにつきつき連絡があったのよ」

塚本遙香は何か分厚く重たいものに入った書類封筒を彼に手渡した。のぞいてみる。すぐに彼は塚本遙香を見た。

「マジみたいだな」

「緊急事態だから、使用届はあとでいいそうよ。あなたのやり方に任せます。でも、うちの社員が陰ながらサポートするから、安心していいわよ」

そこまで言うと、塚本遙香は彼を車から追い出した。

「送っちゃくれないのかよ？」

「ママチャリでいつも帰ってるんですよ。普段通りの行動をしないと相手に怪しま

れる」

「くそ、タイムカードを押し忘れた」

「じゃ、さつきと上に戻って押してきたら？」

「ちよつと待った、一つだけ」

「何よ？」

「ティッシュ、くれないか。切れちまった」

十八時五分

ひりひりする鼻の頭に閉口しながら、彼は六時過ぎにようやく自宅のマンションに着いた。両腕、両足が痺れるくらいに疲労しきっていた。いつもは階段で四階まで上がるようにしているが、今日はエレベーターで構わない。エレベーターの箱に乗り込んだ。ドアが閉じかけたとき、向こうに人影が見えた。走ってくる。彼は「開」のボタンを押して、待った。

「ごめんなきあい。今、お帰りです？」

自称女子大生はにつこりと笑って彼に尋ねた。しなを作るのも忘れない。

「お互い、忙しそうですね」

「ほんと、レポートだの何だのって、いっぱいあって。晩御飯って、食べました？」

期待するような眼で彼を見上げてくる。ぼんは笑みを浮かべ、答えた。

「まだですよ。よかつたら、外で食べませんか？ 俺、おごりますよ」

「ほんととお？ 嬉しい！ わたし、いいお店知ってるんです。こないだ友達と一度行っただんですけど、とても雰囲気がいいところだったんですよ」

四階にエレベーターが停まった。ドアが開いたが、彼女は腕を伸ばし、「閉」のボタンと「1」のボタンを押した。その際に、彼にしなだれかかるように体を近づけてきた。胸の隆起が彼の腕に触れた。いくら疲労していても、これで心臓の鼓動が激しくならない男がいるだろうか。Eカップ、いや、たぶんFカップだ。

「あ、ごめんなきあい」

明らかによろめいたふりをして、彼女は体を彼に預けてきた。彼は無言のままその腰に腕を回した。香水の匂い。見上げる彼女の眼は潤んでいた。濡れた唇。グロスがつやつやと光っている。

二人の動きはほとんど同時だった。

しかし銃声は同時ではなかった。

彼の腕のなかから、力を失った自称女子大生の体がずり落ちていった。続いて、がつんという金属音。彼女の手に握られた銃が、エレベーターの床に落ちたのだった。トカレフだった。〈仁田エンタープライズ〉は、あまりいい銃を使用していないようだ。彼は茶色い書類封筒のなかに右手を突っ込んだまま思った。

ゆつくりとその手を出した。〈三ツ星出版〉が支給してくれたのは、ベレッタF9 2だった。まだまだ〈三ツ星出版〉の業界での地位は安泰だな、と彼は内心でつぶやいた。

エレベーターのドアが開いた。

森本が立っていた。見知らぬ二人の若い男が背後に控えていた。「処理班」の者だろう。男の一人が素早く彼からベレッタをひったくると、もう一人がエレベーターの箱に乗り込んだ。

「あとはあの二人が処理する。おまえはこれから俺と社に戻るぞ。〈仁田エンタープライズ〉対策の会議があるからな」

「一つ、訊きたいことがあるんですけど」

「何だ？」

「今の仕事、特殊業務手当出るんですよね」

森本は呆れた顔になった。

「そりゃ、出るんじゃないのか。ちゃんと仕事したわけだしな」

「それに、残業手当も出ますよね」

「いちいち心配するな。知りたきゃ、社長に訊け、社長に」

ぼんはため息をついた。まだ、彼の月曜日の仕事は終わらないようだった。

「月曜日の仕事」完